

5月26日(土) 11:20~12:00 第一分科会:九州国立博物館ミュージアムホール

---

## 第2次世界大戦後～現代・琉球紅型における画家の表現と系譜

—末吉安久から名渡山愛擴へ—

海洋博覧会記念公園管理財団 児玉 紋里子  
KODAMA Eriko

---

1945年、第2次世界大戦下の地上戦により沖縄は、琉球王国時代の建造物・美術品等の大半を失った。貴重な後継者、そして代々の下絵・型紙・道具類を奪われた琉球紅型の戦後は、まずその技術復興から始まる。1953年、紅型三宗家（沢祇・知念・城間）中の一家・城間を守り抜こうとしていた栄喜（城間家十四代）のもとに、様々な人材が集い「琉球紅型技術保存会」を結成。これを機に一層拍車がかかる紅型復興の努力は、遂に1973年「沖縄県無形文化財」（びん型）指定をもたらす。通常、戦後「紅型復興期」と称される、この間約30年に亘る紅型師らの様々な工夫と表現の革新は、現代紅型の礎を新たに築いた点で、実に重要である。本発表では、この〈戦後紅型復興期〉に生まれた紅型の中で、特に従来ほど注目されなかった画家たち—末吉安久、森田永吉、名渡山愛順一の紅型を取り上げ、その現代一名渡山愛擴へ至る系譜を、初出資料を基とし明らかにしていく。

紅型復興期に活躍した末吉と森田・名渡山愛順、現代の名渡山愛擴。一画家であるよりも紅型師たるうとした他の紅型師たちとは異なり、あくまで終生、画家であることをも貫いた彼らの紅型は、今日に於いてもその斬新さと魅力を発し、我々に紅型の可能性を伝える。彼らの作品の先ず最も大きな特質は、第2次世界大戦後に多く作成されるようになった壁掛けや額絵作品に制作の重点を置き、絵画と紅型との融合ともいべき世界をそれぞれ創り上げたという点である。これは他の紅型師らが、着尺を中心に制作して紅型の美と技術を追求し、さらに、壁掛けや額絵・小物の制作に、時には末吉ら画家の下絵を用いたことなどと全く異なる態度である。その意味で、画家たちの視点と、紅型師らの視点を比較することは、個々人の個性が生み出す作品世界という点に留まらず、紅型の多様性を浮き彫りにして興味深い。本発表では、その点についても、実際の比較を通じて指摘したいと考えている。

そしてまた、紅型復興期に時を同じくし、日本本土で、紅型に鼓舞された意欲的創作を展開する芹沢銈介や鎌倉芳太郎らの人間国宝（国指定重要無形文化財「型絵染」技能保持者）が、実は末吉らと深く係わり合い、相互に世界を広げていったということを明らかにし、それぞれの共通点をも指摘する。

紅型復興期に活躍した末吉、森田、名渡山愛順、そして現代の名渡山愛擴に至る、紅型の中でも特異な、しかし実に魅力的なその表現。それはおのずと「紅型」とは何か、という本質をも我々に示しているのである。